



アカシア俳句会



令和四年 冬季・新年俳句会 「句評」 兼題：除夜の鐘、門松(含・子季語)

一、「特選句」 選定句評

○木枯らしに恩師悠々百歳翁

西村敏治

◆木枯らしの吹く中、百歳にもなられた恩師が悠々とされている。その立派なご様子が目に浮かび感動して嬉しかったです。

吉田以登

○バスを待つありがたき椅子冬真中

西村敏治

◆寒い冬の最中、バス停でバスを待っていると、そこに椅子があり、それに腰をかけることが出来てホッとした。

楠野圭子

○凍て星を天に貼りつけ雲去りぬ

中野亘子

◆かねがね十一階のベランダから雲の動きの早さに驚いていた私の胸に、ストーンと収まりました。

吉澤志保子

◆外に出では、おお寒と思わず身を縮めます。天空の氷片のような星が空に張り付いてと、素晴らしい感性だと思いました。

加龍恵子

◆張り付いた星と流れる雲、静と動、寒と暖の表現が冬の寒さを一層強調したよい句だと思います。

元永悦子

◆凍てつく夜空の光景を動的に描写したところが秀逸。土生俳句論「俳句は映像の交換である」と重なりました。

前田秀一

○目まで湯に沈めば渡る除夜の鐘

中野亘子

◆大晦日の夜、やれやれと湯に浸かると、鐘の音が頭の上から心の中まで染みていく・・・なんと心地よい一句でしょう。

野本展子

○氷壁や響(とよ)むアイゼン空の色

戸堂博之

◆今、この句のように登山をしているなら心身ともに若い人だと思えます。映像を見て若いころを思い出したのかもしれませんが。

佐藤茂弘

○年ごとの思ひさまごま初日の出

富岡訓子

◆初日の出を拝めることは幸せである。八十五年間は悲喜ごまごも、幸不幸もある人生であった。

佐藤多恵子

◆コロナの動向を気にしながら毎年新年を迎えざるを得ない受け身的な今の状況を表しているように感じました。

三木徳彦

○妻病みて雑煮作るも一苦勞

佐藤茂弘

◆我が家も同様になりました。寒夜、卓上コンロで時には鍋とか焼き肉です。

岩壺克哉

◆奥さんが病で臥せっている悲しみと、寒い夜に一人でいる寂しさが表れている。

都 福仁

○大雪を飲みて静かな鳩の湖

佐藤茂弘

◆氣宇壮大な句だと思います。特に後半の場面展開が見事だと思います。

中野亘子

◆テレビで見る大雪の現実感が伝わります。

富岡訓子

○ウイーンより世界へ手拍子年送る

佐藤多恵子

◆黒船来襲で日本は一つにまとまったが、世界が一つにまとまるのはコロナのこの機会か？それを美しく表現されました。

山家由紀

○音消えてまた一つ撞き除夜の鐘

加龍恵子

◆鐘の音が、余韻が消える頃に、次の音が撞かれて響き始める。「ゆく年くる年」の繰り返しのようで、心がひかれる。

西田 稔

○三輪山に門松立ちて掌の音

加龍恵子

◆三輪山を擁する新春の大自然の、清澄静寂厳肅な気まで、結句「掌の音」で見事に表現され、感動を覚えた。

網 佑子

○三角錐メタセコイアの冬木立

斎藤優子

◆一度この美しい光景を見たい願望で！

岩崎悦子

○身体反り榿木一打や除夜の鐘

前田秀一

◆非常に単純ですが、「身体反り」は思いつかない表現で、素晴らしいと思いました。

戸堂博之

◆榿木を打つ姿勢が如実に表現されていて、ごおくん と云う音が響いて来るように感じました。

斎藤優子

二、 気付きのひとこと

佐藤多恵子（元「京鹿子」俳句会同人）

○友逝きて水仙香る凜として

中野亘子

◆「友逝けり水仙の香の凜として」 「香る」（動詞）を「香」の（名詞）としたい。

☆土生俳句論「俳句は名詞で勝負」（編集人註釈）

○紋のれん老舗代々門の松

前田秀一

- ◆「老舗」と「代々」が重なるので、どちらかを省き、具体的な業種を入れたい。
- ◇作者再考 紋のれん味噌屋代々門の松
- ☆土生俳句論「俳句は要を描いて扇全体を提示するもの」（編集人註釈）



本間味噌本店
京都、1830年創業

三、総括講評 私が選んだ句 中野陽典（元「扉俳句会」同人）

皆さんそれぞれに個性を發揮され、粒ぞろいだと思いました。これら作品中から五句を選句されるには大変ご苦労があったとお思います。

「総括講評」という役目をいただき拝見しましたが、私自身も思案することとなり、「私が選んだ句」として以下十六句の「選句」で役目を果たさせてください。

会員の皆さんが、各自ご自分の好きな句を選び鑑賞していただくとよいと思います。

選句番号	中野陽典「選句」作品	作者
1	除夜の鐘 コロナ 祓いて響きけり	野本展子
4	木枯しに 恩師 悠々 百歳翁	西村敏治
8	七草や 餅禁制の 老ホーム	佐藤多恵子
12	妻病みて 雑煮 作るも 一苦勞	佐藤茂弘
16	氷壁や 響（とよ）む アイゼン 空の青	戸堂博之
17	風呂吹きや 夫婦の 愛でて 吟醸酒	前田秀一
21	コロナ去りまた 異種 コロナ 年の暮れ	都 福仁
29	日向ぼこ 祖母の 背中に 近づきぬ	吉澤志保子
36	旅の 寺鐘 ひびきを りをり 百八つ	西村敏治
47	三輪山に 門松 立ちて 掌の音	加龍恵子
54	妻病みて 寒夜に 開く 料理本	佐藤茂弘
56	門松や 遠くに 去った 昭和かな	都 福仁
59	紋のれん 老舗 代々門の 松	前田秀一
65	風物詩 下駄の 音やら 除夜の 鐘	都 福仁
67	身体 反り 槿木 一打や 除夜の 鐘	前田秀一
68	枯木 立梢の さきの 薄き雲	富岡訓子

以上、「選句」資料（無作為配列集）より

「編集後記」

昨年未開催の総会（令和三年十一月三十日）で、以下「アカシア俳句会」活動目的を再確認しました。

「今」を捉え、「自然と人間との関わりを詠う」（季節感、連想力）、「感動を詠う」、「何を詠うかではなく、いかに詠うか」、「ものに託して心を詠う」などを基本とする「土生俳句語録」（*）を規範として

切磋琢磨し俳句力の向上と会員相互の親睦を図る。

その一方で、活動の充実（指導、会員増強）と持続可能性（若年者との交流、「会」の活動目的の継続）を目指し、「三丘同窓会」傘下の「俳句会」として運営移管の折衝を始めることを決定しております。先ずは、手短なところで参加者を増やすことに重点を置き、「投句」の案内は、「無理やり」五句ではなく、「感動」の一〇五句としてご案内するようになりました。

早速、池川静男さんが今回から「投句」に参加され、西田 稔さんが「選句」に参加されました。さらに、現会員においては、実情に合わせて二句、三句を投句され活動の継続に務めておられます。

「俳句」という文芸は知的な満足をくすぐる魅力の一方において、閃きに疎く、語彙乏しく、真似事の域を出ない表現力に悩む私にとって、「土生俳句語録」(*)は指針であり手順を示唆し作句を支える教本としております。

初めて参加した「金剛俳句会」第二回目（平成二十五年九月十九日）で、小川誠二郎師（元「扉俳句会」同人）から「読者への配慮」についてご指導をいただきました。

落葉踏む樹々の道行き明日想ふ 前田秀一

「明日想ふ」その内容は作者の心にあって、読者には判りませんので、読者は置いてけぼり食べた感じになります。こういう句を「観念句」と言って、世の俳句には多く見られますが、「扉」俳句では排することになっています。読者には判らない、ということと、季語は何でも通用するので、季節感を呼ばない、というのが理由です。

紅葉は世代を代る命の火

小川誠二郎師（元「扉俳句会」同人）指導

と断定して、読者に投げかけて見ましようか。我らの人生も終盤戦。大いに燃えましよう。

「俳句はものに託して心を詠う文芸である」（鑑賞者と感動の光景を共有する文芸）、「土生俳句語録」(*)の核心を学ばせていただき、味わいを深めております。

如何でしょうか。

*…詳しくは、URL検索エンジンに「アカシア俳句会」と入力しクリックしてアクセスしてください。

編集人 前田秀一